過去へ

ぽんた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
過去へ

【Ｎコード】
Ｎ０２０７Ｚ

【作者名】
ぽんた

【あらすじ】
６代目火影うずまきナルト

第五次忍界大戦を終決させた英雄

うちはマダラを九尾との和解したことにより完全に消滅させたのだ

そして６０年あまりの時が過ぎ６代目火影うずまきナルトはこの世を去ったのだが

『どうなってんだばよ！！！！！』

何故かアカデミー卒業前に戻っていた

注　中傷などはご遠慮願います

６代目火影うずまきナルト

６代目火影うずまきナルト

歴代火影どころか歴代最強の忍びと言われている

その理由としては第五次忍界大戦による活躍によるものだろう

うちはマダラと激突

苦戦を強いられるものの戦いの最中に九尾と同調し見事にうちはマダラを完全に消滅させた

それから６０年あまらの時が過ぎる

ナルトはこの時７５歳

しかしその寿命はつきようとしていた

『どうやらみんなとお別れぽいってばよ．．．．．』

『ナルト・・・・・』

ナルトの妻であるうずまきサクラ旧姓春野サクラがナルトの名前を呟く

サクラは始めこそサスケが好きだったのだがナルトの何事にも挫けない姿勢に弾かれたのだ

『俺の出来ることはすべてやったてばね。あとはみんなに任せるってばよ』

‘九尾・・・悪いがこっちに一緒にきて貰うぞ’

【なにを今更・・・・ワシが主と認めたのは6代目火影うずまきナルトだけ!!主が死ぬと言うのであればわしも死ぬわい!!!!!】

‘悪いってばね’

『サクラちゃん。先にいってるよ』

『結局ちゃん付けは最後まで直らなかったわね』

サクラは泣きながらも答える

そしてそのままナルトは息を引き取った

妻のサクラ・子供達・仲間に見送られながら・・・・・

こうしてナルトは人生を終えたのだった

卒業試験前日

‘ここは何処だ？’

ナルトは目を覚まし回りを見る

『ここって俺が前に住んでたアパート？』

回りを見渡してみたらカレンダーが目に入った

『！！！！！！』

カレンダーにはアカデミーそつぎょうしけんと書かれていたのだ・・・・それも汚い字のうえひらがなで

『どうなってんだってばよ！！！！！』

【どうやら過去に遡ってきたようだな】

『！！！九尾？？！』

【どうやらナルトと共に死ぬつもりが過去に帰ってきてしまったらしい】

『お前そんなことでかるんだってばよ??』

【出来るか!!!!!なぜ戻ってきたかわしにもわからん】

『う〜ん』

ナルトは考える。ちなみに勉強は妻のサクラに火影になるときに『デスクワークの仕事もあるんだから勉強ぐらいできなさい!!!』と叩きこまれたのでかなり頭はいい。
それこそこの時代のサクラより
しかし天然ばかのところは結局直らず何かあるごとに怪力で殴られたのだが・・・・

しかしいくら頭が良くなってもも前代未聞のことゆえいくら考えても分かるはずがなかった

『いま思ったんだけど3代目のじっちゃんやエロ仙人も生きてる?』

【まあ生きとるだろうな】

『今からなら死ぬはずの人も助けれる?』

【まあ助けれるだろうな・・・・それよりいいのか?】

『何が？』

【時間・・・】

『・・・・ア　ァ～！！！！！』

完全に遅刻である

慌ててナルトは着替える
しかし昔の忍服を手に取った瞬間
『うわぁ～懐かしい～』
と手が止まるが
【遅刻だぞ？】
と九尾に言われ慌てて着替えだす

『馬鹿者～！！！！！！』

ナルトは完全に遅刻してしまいイルカにこっぴどく叱られている

『明日は卒業試験だぞ！！お前は2回も落ちてるんだぞ！！遅刻なんてしてる場合じゃないだろ～！！！！』

しかしナルトは自分の時代では死んでしまっている恩師に会えたことで感激していたため話しを聞いてなかった

そのためイルカは

ビキッ？

『今から変化の術の抜き打ちテストだ！！先生そっくりに変化する事！』

キレた

当然ナルトに『お前のせいだぞ』とクラスメイトから言われるのだがナルトの耳には入ってなかった

『次ナルト！！』

と言われナルトは普通に印をくみ変化してしまった

『！！！！！！』

当然である。まだこの当時ナルトはドベである

‘しまった〜！！！’
と思ってもすでに時遅し
イルカは驚いた顔をしている

‘誤魔化さないと’ナルトは誤魔化すことにし
『じつは昨日スゲー修行したんだってばよ！！！だから寝坊しちゃって！！』
というと
『そうかお前も頑張ったんだな』
と誉められた
『へへっ！！！』
と言ってると
『でも遅刻はほめられんぞ』
とくぎはさされた

家でナルトは九尾と相談していた
『これからどうすればいいと思うってば？』

【とりあえずは全力はださんほうがいいとは想うの。怪しまれるだけじゃろうし。しかしドベでいる必要はないじゃろ。手の内は隠してたとかいいわけはできるしの】

『そうだな。それと今まで使えた術は使えるってば？』

【問題あるまい。変化の術を問題なく使えたことからかんがえてな。

ただ身体能力はもとにもどっておるみたいだがの。しかし昔と違ってチャクラコントロールは完璧じゃしさほど問題あるまい。】

『わかってばよ。とりあえず寝るか』

とナルトは布団に入りタイムスリップ1日目を終えた

卒業試験（前書き）

試行錯誤の繰り返し

もう少し文才が欲しいです

卒業試験

『ふぁ～よく寝た』
以前自分のいた時代では歳のせいか夜中にトイレに行きたくなるわなかなか寝付けないはでゆっくり寝れなかったのである

【今日の卒業試験はどうするつもりだ？】
九尾が聞く

『普通に合格するつもりだってばよ。ミズキのやつはどうせ動くだろうし』【しかし何がミズキを動かす餌は必要じゃろう？】

『だったら卒業試験で影分身を出せばいいってば。そしたら禁術書のそんざいに気づくだろうし』

【まあ好きなようにするがいい。それよりまだ時間はあるがどうするのじゃ？】
『う～ん・・・・演習場に行くか。いろいろ確かめたいことがあるってばよ』

そしてナルトは演習場に着くと結界をはり今まで使えた術などいろいろ試してみた。
『今まで使えた術はほとんど使えたけどまだ契約してないから口寄せだけは使えないってば』

【わしのチャクラを引き出せるか？】

『よし！久しぶりにやるってば！！！』

とはいえ不安はあった。何せ現役を退いてから5年ほどは九尾のチャクラを使ってなかったのだ。

しかしいざ使ってみると

『あれ？？いままで以上に何か馴染む感じがするってば？』

【ククク・・・・自分の顔を見て見るがいい】

『ふぇ？？』

ナルトは自分の顔を湖で見て見ると

『何じゃこりゃ？？！』

今までは目が赤くなるだけだったのに瞳孔が開いて人外なものに変わっていた

【まさか過去へ戻ってきてフルにわしの力を使えるようになるとはの】

『今までのは？』

【2割も使えとらんかったわい。それ以上はからだがもたんかったしな】

『でもこの目はなんかやだってばよ』

【ククク・・・・その目はなかなか便利じゃぞ？試しに自分の手を見てみい】

ナルトは自分の手を見てみると

『チャクラの流れが見える？それどころかチャクラの出てる穴まで見える。これは点穴か？』

【そうじゃ。それにその目じゃと幻術も見破れるしの。さらにその状態じゃと目をつむってても気配のないクナイなどの動きまで掴める。つまり完璧に３６０度死角はない。まぁわしの目じゃからの】

『ふぇ～でもいざって時以外使用は控えたほうがよさそうだってばよ』

【そうざゃな。まぁその状態にならなくても十分強いし問題あるまい】

『よし！そろそろ行くってばよ！！！』

『卒業試験の課題は分身の術だ！』

イルカが前で説明してるのを聞いている。

‘ここまでは前と一緒だってば’

【これから変えるのだろう？】

『もちろん！！！』

そしてナルトの番が回ってくる

『よし。分身の術だ。始め！！！』

‘影分身の術’

印を素早く結んで5人の影分身を出現させる

『『なぁ！！！！！』』

試験官たちは当然驚く

『『これで合格だってばか？』』

ナルトがそう言うとイルカが

『ああ。合格だ！おめでとう！！』

と額当てをくれた
ナルトが横目でミズキを見てみるとまるで汚いものを見るような目でナルトを見ていた

ナルトは卒業試験が終わった晩に森へ来ていた

『ミズキ先生いい加減出てくるってば』
『気付いていたのかいナルト君？イルカ先生にも気付かれなかったんだがね』

『そんなに汚いもの見るような目で見られてたら誰だって気付くってば？』

『まぁいい。ナルト！！！禁術書を出してもらおうか！！！』
ミズキが本性出した。ナルトが無言で睨んでいると
『まあいい。殺して探すまでだ！！！』
と背中の大型手裏剣を投げてきた。ナルトがそれをかわそうとしたら
グサッ！！！
イルカが出てきてナルトをかばっていた
『ぐっミズキ！！！生徒になにしてんだ！！！』
『イルカ！！！』
『ナルト！早く逃げろ！』

しかしナルトは心中穏やかなものではなかった
‘イルカ先生が出てきたのは計算外だ！それにしてもイルカ先生を

傷つけやがって！！！，

かなりお怒りのようだ。ナルト特有の口癖が消えている

『イルカが出てきたのは計算外だが一緒に始末すればすむこと。それよりナルト？少し余興を込めて話してやろう。お前がなぜ里人から憎まれているのかをな』

『！！！止めろミズキ！！！』

『お前にはな１２年前に里を襲った九尾が封印されているんだよ！！！』

『止めろ！！！』

イルカは制止をかけるがミズキは止まらない

『そこにいるイルカだって本当はお前のことが憎いんだよ！！！つまりお前を殺したところで誰も悲しまない！！』

ミズキは唾を吐きながら叫ぶ

『ミズキ違うぞ！ナルトはなぁたしかになぁドジだし忍術も勉強も苦手かもしれない。だがな！！！』

そこでいったん言葉を切りナルトのほうえ顔を向けニッコリ笑って言った

『ナルト？お前は誰よりも負けづ嫌いで努力家だ。この間の変化の術や今日の影分身もこの努力の賜物だろう。お前は俺の誇る優秀な生徒だ！！！』

そう言いきった

『まぁいい。イルカも化け狐と一緒に死ぬがいい！！！』

その瞬間もう我慢の限界とナルトがキレた

ナルトは印を結び術を発動する

『忍法　影分身の術』そう言ってその場を埋め尽くすほどの影分身を出した

『なんだと！！！』

『ナルトお前！』

ミズキは唖然と回りを見回しイルカは驚いている

『イルカ先生を傷つけた礼をさせて貰うってばよ！！！』

そして大量のナルトがミズキに遅いかかり『うぎゃ～』という悲鳴がそこらじゅうに響き渡った

『イルカ先生大丈夫だってばか？』

ミズキをボコボコにしたあとナルトはイルカに肩をかしている。

『ああ。しかしあれはおどろいたぞ』

『へへ♪俺ってば必死に修行したもんね～』

と言いながら病院へイルカを連れて行ったのだった

班結成（前書き）

更新遅くなりました

班結成

朝ナルトはアカデミーに行く準備を終え額宛をつけた
『懐かしいってばよなんか』
【ここから全てが始まったんじゃな】
『ああ。よし！行くってばよ！！！』

アカデミーの教室で待っていると
『なんでドベのお前がいるんだよ』
『お前今日来なくていいんだぞ？』
からかうようなことを言うやつらばかり
そんななか一人の少年を見つけた
‘サスケ・・・・’
そううちはサスケだ

そうもといた自分の時代では激戦の末サスケの奪還に成功していた。その後サスケは暗部総隊長まで上りつめたのだが呪印を受けた影響があったのか４５歳という若さでこの世を去ったのだ。ナルトが死ぬ３０年も前である。

ナルトが思考の深くに入っていると
『ちょっとそこどきなさいよ！！私はそっちにいきたいの！！！』
サクラがいた
‘サクラちゃんメチャクチャ幼いってばよ’
と思いながらも

『はいどうぞっ』
と道をあけていた
サクラにとって以外だったらしく驚いていたが『ふんっ』ていいながらサスケのところに行った
【いいのか？】
‘しょうがないってばよ。まだこの時サクラちゃんサスケのことが好きだし’

心のなかで九尾と話していると
『ようナルト』
『シカマル、チョウジ』
話しかけてきたシカマルとチョウジがいた。この二人は両親が４代目と仲がよくナルトのことを偏見の目で見ることがなかったのだ

『まぁお互いめんどくせーけどがんばるか』
とシカマルが言うと
『ああ』
とナルトは笑みを浮かべながら答えた

この時、んっナルトのやつなんか雰囲気変わったか？
とシカマルはナルトの変化に気づいたがまぁ気のせいだろってことにし後ろの席に座った。

しばらくしたらイルカがきてこれからのことを説明していたのだが・・・・・・ナルトは以前にも聞いるため寝ていた

そしたらイルカが
『ナルト?説明を聞け!!!』
とチョークを投げた
『ふぇ?』
っと顔をナルトは上げると目の前にはチョーク。おもわず手元にあった鉛筆を投げてしまった。しかも風の性質変化のおまけつきで
心のなかで‘あっ’と思った時はすでに時遅し。チョークは粉々になりイルカのほうに鉛筆は飛んでいった
なんとか紙一重でイルカは交わしたものの鉛筆は黒板を突き抜けてしまった

『なぁ!!』
っと下忍にこれからなる8人はビックリしていた
サスケは‘こいつホントにあのドベかっ?’と思っていたしサクラは‘ナルト??!’っと驚いていた。他の6人も同様である。ちなみにそれ以外にいた子供達ではナルトがなにをしたかも分からなかった。その為他の子供達はイルカに説明をといいだし途方にくれていたイルカは
『ナルト説明はちゃんと聞けよ』
と言うと説明に戻った

場所は変わりナルトの家
『ここがナルトの家か。話に聞いていたイメージとかなり違うな』
っと思っていたのはカカシ
大量の本や巻物があるのだ
ちなみにこれはナルトが影分身を使って集めたり書き写してきたりしたものだ

『ナルトのやつはカカシお前に任せる。注意していてくれ。あとうちはの生き残りのサスケもいる』
『了解』
3代目が言うとカカシが答えた
‘こりゃ大変なことになりそうだ’
とカカシは思うと思わずため息をついた

そしてしばらく時間がたち教室ではサスケとサクラとナルトの3人が待たされていた
『どうなってんのよ!!他の班の先生はとっくにきてもう行ったのに!!』
と言いながらナルトの方をみた。ナルトは・・・・寝ていた。
‘さっきのナルトはなんだったのかしら?’
と思いながらさっきの出来事を思い返してみた

イルカが説明を再び始めてもサクラはナルトの方を見ていた。そして黒板のほうをみる。小さな鉛筆が通った穴。どうやったらあんなことが出来るのかと考えていたため自分の名前が呼ばれていても気がつかなかった。
『7班うちはサスケ』
『ふんっ』
『春野サクラ』
『サクラちゃん?名前呼ばれたよ?』

『あっはい・・・・』
とサクラは答えた。サスケと同じ班になったというのに不思議となんの感情も湧いてこなかった

『そしてうずまきナルト』
そしてこれにはサクラだけではなくサスケも驚いていた。
『はい』
とナルトが答えると
『サクラちゃんサスケこれからよろしくだってばよ』
と微笑みながら答えた
それにサスケは‘こいつ俺を目の敵にしてなかったか。何の心情の変化だ？’と思ったしサクラに関しては思わずナルトを見惚れてしまった

そんなことがあったためかサクラはナルトの笑顔をみると何故かドキドキしてくるのだ

‘なんでナルトなんかみてドキドキしてるのよ。私が好きなのはサスケのはず。でも・・・・’
サクラは目を瞑り考えた
‘同じ班になるならこの気持ち確かめなきゃ’
と思っていたら
『やぁ諸君こんにちは』
とカカシが教室に入ってきた
『おっそ～い！！！！』
サクラは怒鳴り
『いかなり遅刻かよ』

とサスケはこぼし
『先生きたぁ？』
とナルトは起きた
そしてカカシの第一声は
『お前らの第一印象はな・・・・嫌いだ』
と言い教室に暗い雰囲気が漂った

『まず自己紹介でもして貰おうかな』
場所は移りテラスみたいな所

ナルトは思っていた
‘カカシ先生相変わらずだってばよ’
【遅刻癖もな】
‘しょうがねえだろ。ちゃんと理由はあるんだし’

ナルトはカカシが遅刻してくる理由を昔カカシ本人からきいて知っていた。

『自己紹介って何を言えばいいんですか？』
手を上げてサクラは聞く
『名前と好き嫌いあとは将来の夢とか趣味とかな』
『それじゃあまず先生が自己紹介してくださいよ。右目しか見えて無くてなんか怪しいし』
‘確かに怪しいしなぁー’
とかナルトは思っていると
『あっ俺？名前ははたけカカシっていう。好き嫌いは色々。将来の

夢って言われてもなぁー趣味はお前らに教えるつもりはない』
とカカシが言うと
『結局わかったのって名前だけじゃない？』
サクラはいう
『それじゃあ次はお前らまず右端の金髪から』

『名前はうずまきナルトだってばよ。好きなものは一楽のラーメン。イルカ先生。他にも仲良くしてくれる人。嫌いなものは・・・・』
そこでナルトは一回言葉を切る
みんなが不思議な顔をしてナルトの顔をみるとナルトの顔が豹変してビックリした
『仲間を大切にしないやつ。仲間や大切な人を傷つけようとするやつ。将来の夢はそんな大切な人を守こと』
これだけのことを言い切ると表情を戻した
『趣味は読書かな』
‘成る程ね’
カカシはあの本と巻物の山を思い出していた
一方サクラは今度は素直にナルトのことを
‘かっこよかったな’
と思い始めていた。
サスケはナルトの表情を見た瞬間に鳥肌がたって背中の何か冷たいものが流れたのか分かった
‘なんだあの表情は。寒気がした。ホントにあのドベか？’
と思い始めていた。
『次桃色の髪の子』
『はい！名前は春野サクラです。好きなものっていうか好きな人はっ』
‘あれっ今まではサスケ君が好きだったけどいまは？’
っと思っていうと
『早くしろ』

とカカシが言ったので
『っ！好き嫌いは特にありません。趣味っていうか特技は暗記です』
っと早口で言った
カカシは
‘不思議な子だな’
と思っていて未来のことを知っているナルトは
‘あれ？前と何か違うってば？’
と思っていると
【ククク お前は相変わらず女心理解力ゼロじゃの～】
と九尾が言ったのでナルトは聞き返そうとしたがサスケの自己紹介が始まるとこだったので止めた

『俺の名前はうちはサスケ。好き嫌いは特にない。趣味の夢って言葉で終わらすつもりはないが野望はある。一族の復興とある男を殺すことだ』
っとサスケは静かに言った
カカシはやはりと思っていた。サクラは以前ならかっこいいと言っていただろうがいまはナルトに気持ちが傾きつつあるから冷静に見れるのか
‘何かサスケ君怖いような寂しいような’
っと思っていた
一方ナルトは
‘俺がお前の道を変えてやるってば。復讐なんてのは虚しさ以外何も残らない’
【それは平坦な道ではないぞ？】
‘そんなのわかってるてばよ。でも前にも言ったけど俺は一度言った言葉は曲げねえ。それが俺の忍道だ！！！’
と心の中でもう一度心の中で強く強く違っていた。
そこでカカシは一回手を叩き

『よし。自己紹介は個々までだ。明日から任務をやる。』
っと言うとみんな顔を上げた
『まずこの４人だけで任務を行う。サバイバル演習だ』
サクラが反論する
『何で任務がサバイバル演習なの??！いままで散々アカデミーでやったわよ！！』
『相手は俺だがただの演習じゃない』

『どんな演習なのよ?』
『ククク』
『な何が可笑しいのよ?』
『いやこれ言ったらお前ら絶対引くから』
カカシが嫌な笑みを浮かべる
‘カカシ先生その笑みだけで引くって?’
【変態なだけだじゃろ】
毒をはく九尾に思わずナルトは苦笑いを浮かべる
『引くわけないじゃない！そこらの人と一緒にしないで！』
‘こんなとこで引くわけないじゃないしゃーなろー！！！！！’
今のナルトは内なるサクラも見えるのかさらに苦笑い。まあ表情に出てるのでバレバレなのだが
『卒業生２７名から下忍と認められるのはわずか９名。残り１８名はアカデミーへ戻される。脱落率６６％以上の超難関テストだ』
カカシがそのことを言ったとたんサスケとサクラの顔が驚きに変わる。って言うか引いてる。サクラなど頬の辺りをヒクヒクさせていた。
『ちょっと待ってよ！じゃあアカデミーの卒業試験はなんだったのよ！！！』
そこでいままで閉ざしていた口をナルトが開く
『多分あれは下忍になれる者を選抜するための試験だったんだと想うんだってばよ。普通に考えて分身の術が出来ただけで忍者になれ

るっておかしいし。そうだよな！カカシ先生？』
『ああそうだ。よくきずいたな』
カカシはニッコリ笑って言ったが心の中では違うことを考えていた
‘言動や雰囲気が新米下忍とても思えんな。少し注意しておくか’
と心の中では警戒心が生まれ始めていた
『とりあえず詳しいことはこのプリントに書いておいたから。それ
と朝めしはぬいてこい。吐くぞ』
といい解散した

サバイバル演習1（前書き）

更新遅くなりました

後これからの物語を考えた上で追加の設定などありますが応援して貰えたら幸いです

サバイバル演習１

「やぁ諸君おはよう」
「おっそ～い！！！」
サクラが遅刻してくるカカシに怒鳴る
サスケは呆れてものが言えないようだ
（いくら理由があるってもこう何時間もまたされたらキツいよな）
ナルトも心の中で思う
「よし。１２時セットＯＫ」
サクラとサスケは頭に??が浮かんでいる
「ここに鈴が２つある。これを昼までに俺から奪い取るのが課題だ。ちなみに鈴を取れなかったやつは昼飯ぬき。丸太に縛り付けて弁当はその前で食うから」
（朝飯食ってくるなってのはそういうことだったの〈か・ね〉）
サクラとサスケはそう心の中で思いお腹がなり赤くなる
ちなみにナルトは朝御飯はきっちり食べてきていたりする

「鈴は一人一個でいい。そして鈴を取れなかったやつは不合格。つまり誰か一人は学校に戻ってもらうことになる。手裏剣使ってもいいぞ。俺を殺すつもりでこなければとれっこないからな」

「でも先生危ないわよ！！」
サクラが言う
（やっぱりこの時点でわかってるわけないよな。仕方ない）

ナルトはホルダーに手をもっていきクナイを投げようとしたが
「まだ俺スタートって言ってないだろ」
一瞬でナルトの背後に回りクナイの持っている手をナルトの頭につけた

サクラとサスケは当然驚く
（うそっ・・・・まったく見えなかった）
（これが上忍か）
とサクラとサスケは思っていたのだがバチバチと嫌な音がその場に響く
ナルトの持っているクナイの柄に起爆札が巻かれていたのだ
サクラとサスケは慌てて距離を取ると
ズガッ～ン！！！
耳をつんざくような爆発音が聞こえ目の前は煙で何も見えなくなる
しかしカカシは爆発のすでに外にいて
「なかなか過激なことするね～」
と余裕の表情をしナルトは
「これぐらいやったて上忍は死なないってばよ？」
と煙のなかから出てきた。無傷で

何故無傷でいられたのかサクラとサスケは不思議に思っていたが土遁硬化の術で体を硬化していたためである

「俺を殺すつもりできてくれるようだな。やっとお前らのことが好きになれそうだ」
そしてカカシが腕を上に上げると
「それじゃあ始めるぞ。よ～いスタート！！！」

サバイバル演習が始まって5分ナルトは身を隠してどういうふうにでるか考えていた
（いきなり上忍レベルの術とか使ったら流石に怪しまれちゃうってば？体術もある程度手を抜かないと）

【そうじゃのう。でもサクラやサスケのやつは昨日のこともあるし逆に手を抜きすぎたら怪しまれるぞ？】
（そうなんだよな～。ん？今回はカカシ先生から動くのか？この方向は・・・・サクラちゃんの方へ向かってるな。確かサクラちゃんは幻術奈落見の術をかけられるはず。Dランクの幻術だし精神的にそんな深いダメージはないだろうけど・・・・幻術返しぐらいしてもいいってばよね？）
ナルトはサクラやサスケにチームワークの大切さや仲間意識の大切さなど知って貰うためにもある程度のことはムシするつもりだったがやはりいざとなるとサクラには甘かった。

そのころサクラはさっきの出来事を考えながら移動していた
（さっき見せたカカシ先生の動き。あんなのから鈴を奪えだなんて絶対無理だわ。ナルトかサスケ君と合流出来ないかし・・は！！）
サクラのすぐ近くにカカシの姿
（せ・・セーフ・・・・）
「サクラこっち」
「えっ？」
サクラが振り返った時にはカカシは術を発動しておりサクラは幻術にかかっていた。
「えっなにが？カカシ先生は？？」
「さ・・サク・ラ・ちゃん。た助けて・・」
「その声はナルト！！」
サクラが振り返るとそこにいたのはクナイや手裏剣が身体中に突き刺さり血塗れのナルトがいた
「ぎぎぎゃ～！！！！！」
「解ッ！！！」と聞こえる声

サクラは正気に戻ると自分の首に指を当てているナルトに気がついた
「え？・・・・なんで？あんた血塗れだったじゃない？」
「サクラちゃんカカシ先生の幻術にかかってたんだってばよ」
ここでサクラは驚く。ナルトが幻術返しが出来ることに。ただもう一つ気になったことは
「なんであんたは私を助けたの？ほって置けば競争相手は減ったのに」
サクラはこの事に凄く疑問を感じた
「それゃこれから一緒の班で動くんだしそれに仲間を助けるのなんて当たり前だってばよ」
その言葉にサクラは思わず頬を赤く染めた。ただ一つ疑問点も出てきた。
「これから一緒の班で動くっ・・」
「ストップサクラちゃん。ここから先のことは自分で考えるってば？」
そう言うと頭に？を浮かべているサクラを残してナルトはその場を去った。

ナルトはサスケとカカシの気配の所に行くと
「まあ出る杭は打たれるって言うしな。ハハハ」
すでにサスケは埋められたあとだった

ナルトはサスケを助けるため出ようとすると
「あとはお前だけだ」
とイチャパラを片手にカカシが背後の木の枝の上に立っていた
「だがまず確かめたいことがある・・・・ナルトお前は何者だ？」
カカシが殺気を含めた視線をナルトに浴びせる

しかしナルトは火影にまで上り詰めたのである。その程度の殺気では動じない

「カカシ先生。何者だって俺の名前言ってるし言ってること矛盾してるってばよ」
カカシは頭をかきながら
「そういう意味じゃなくてだなぁ・・・・まず始める前にお前が見せた動き。どう低く見ても中忍レベル以上の動きだ。気配の消しかたなんて特にそうだ。俺は鼻が効くからお前のだいたいの位地は掴めるが気配が感じられなかった。それにサクラに幻術返しをアッサリしたのもそうだし俺とサスケの位置をアッサリ押さえていたのもしかりさらには俺の殺気を浴びても微動だにしない当たり新米下忍とは到底思えない。さて質問を戻すぞ。お前は何者だ?」
カカシが身構える

ナルトは考える
(カカシ先生メッチャ怪しんでるし?どうするかなぁ〜)
【とりあえず何か適当に言い訳するしかないの。例えばわしのことなどな】
ナルトは九尾の言葉に成る程と思いながら言葉を放つ
「カカシ先生も当然知ってるよな?俺の腹に何が封印されてるかを」
「!!!」
カカシ驚愕の表情を浮かべる
さらにナルトは続ける
「そういうことだってばよ。俺ってば里の人たちに嫌われてるから当然暴力や殺気を受けるのが当たり前だったんだってばよ。気配を消すのを上手くなったのは里の人達を避けるため。殺気に関しては小さいころから浴びすぎて慣れちまったってばよ」
デタラメもいいとこである。しかし流石にホントのことは言えたものではないのでカカシの出方をまつ。するとカカシは見事に信じた

「そりゃ悪いこと聞いたな」
カカシはもの凄く申し訳なさそうな顔をしている
ナルトは心の中で
（何とか誤魔化せたってばよ）
とため息を吐いていた
「ナルト。しかし試験とこれは別問題だぞ？」
カカシが再び身構えると
「でも鈴を単純に奪うだけじゃ合格じゃないってばね。そもそも下忍が上忍から鈴を奪うなんて無茶もいい所だし。カカシ先生？」
カカシは再び驚愕の表情。しかしその後笑顔を浮かべ
「成る程ね。ナルトは始めからこの試験のことを分かってたわけね」
クククとカカシが笑いだす
「でも時間はまだあるみたいだしせっかくだから俺も鈴取りするってばよ！」
カカシは以外そうな表情を見せたが
「まぁお前に関してはアカデミーの成績はあまり当てにはならなさそうだし・・・・それにけっこう興味があるのよね。よし相手してやるよ！」
そう言うとナルトとカカシは一定の距離をとった

サバイバル演習２（前書き）

何とか今日中に書けました？

それではどうぞ

サバイバル演習2

カカシとナルトが一定の距離をとって対峙する

【どのくらいの力を出すつもりじゃ？】

（そうだなぁ～・・・・とりあえず九尾モード仙人モードは却下の方向で体術に関しては俺ってば身体能力が元に戻ってるからある程度名一杯やっても大丈夫かと。術は臨機応変に）

【けっこう力を見せるのだな？】

（ん～カカシ先生の口ぶりからしてもう中忍以上の力があるのは予想してるだろうし逆に手を抜きすぎるとばれるってばよ。それに俺ってばまだこっちに来てから誰ともまともに対峙してないから自分の力がどれくらいなのかイマイチわからねぇ～）

【成る程な。カカシを使って今の力を試す訳か】

（そういうこと。まぁこのまま待っててても時間がもったいねぇしこっちから手を出すってばよ！）

そう心の中で言うとナルトは素早くカカシの懐に入るとスイゲツに向けて掌底をつきだした

「なぁッ！！！」

カカシは慌てて両手を交差してガードする

（なんて奴だ！懐に入ったスピードは中忍以上・・・・下手したら上忍の域に達している。それにとてつもなく重い）

カカシは最初に見せた動きからある程度は出来るだろうとは予想していたがそれを遥かに超えたものの動きをナルトが見せたため驚愕の表情を浮かべていた

そこへ追い討ちをかけるがごとくナルトは回しげりを放つ。カカシはそれを両手でしっかり掴むと思いっきりほうり投げた。

ドッボーンと凄い音を立ててナルトは池に飛び込むことになる。

その様子を見ていた二人がいる。サクラとサスケの二人だ。

サスケは今のやりとりを見てナルトが自分よりも遥かにたかい戦闘力持っていることを容易にわかってしまった

（スピードもパワーも遥かに俺をしのいでやがる。一体アイツは）

サスケは考えはじめた。

一方サクラは

（え？え？何が起こったの？ナルトが消えたと思ったらカカシ先生のところにいて・・・・池に落ちて？）

サクラは今のナルトの動きを捉えきれなかったため消えたように見えたのだ

（それにしてもカカシ先生の強さはメッチャクチャね。始めの動きをみてもそうだったけどどうやって鈴なんか取れば・・・・）

ここでサクラはさっきナルトが言っていた事が引っかかった

（ナルトは何か知ってるのかしら？）

サクラも考え出したのだった

一方川に放りこまれたナルトは

（やっぱり九尾モードや仙人モードなしでカカシ先生とやるのは辛いってば。何か考えねぇと・・・・よし）

『忍法影分身の術』
影分身を2体出し本体のナルトは無駄のない動作で手裏剣を投げなおかつ影分身2体を大型手裏剣に変化させ少し時間差をつけて投げる

カカシは自分の急所目掛けて鋭く飛んできた手裏剣を全てクナイで弾く。しかしさらに大型手裏剣がカカシを襲う。それもクナイ2つを使い器用に弾いたのだがその大型手裏剣の死角からさらに大型手裏剣が襲う
（これは影手裏剣の術！！！）
からうじてその大型手裏剣は避けたのだが
ボン！
ナルトがカカシの背後で変化をとく
（いまだ！！！）
鈴を迷わず取りに行くのだがそれに気づいたカカシはかろうじて避ける
「くっそ～！！」
ナルトは何を考えたかカカシに向かって突進しカカシに体当たりをする。ここで妙な違和感にカカシは気づく
（どういうことだ？俺に攻撃するためでも鈴を取るためでも体当たり。それも俺を捕まえるように）
そうナルトは首に力を入れてまるでカカシを放さないように掴んでいたのだ。しかしそこで

ジジジジジジ

と嫌な音がカカシの耳をついた。そう開始直前の
（起爆剤か！！！！！）
そう思った瞬間には大爆発を起こしていた。
「これでどうだ？」
ナルトが川の中から上がってくる

しかし煙の中から出てきたのはバラバラになった木の枝。
（変わり身の術か！）
その時ナルトの足元から手が出てきて足首を掴むとナルトを土中に引きずりこみその反動でカカシが出てくる
「うおっ！！！」
『土遁　心中斬首の術』
ナルトは埋められてしまった
「まぁ体術や手裏剣術などはなかなかのもんだったと思うよ。だがまだまだ甘い。」
そこでニヤリとナルトが笑う。カカシがそれを不審に思うと

チリン

「へ？？」
背後を見ると鈴をもったナルトがいる。腰を見ると鈴が一つなくなっていた
（やられた）
カカシは心の中で思い思わず片手で頭を抱えた
「甘かったのはカカシ先生のほうだってばね」
そうなるとがニシシと笑いながら言うと役目を終えた埋められた影分身は消えた

そして試験終了の目覚まし時計が鳴り響いた

チームワーク（前書き）

ようやくサバイバル演習終了ッス

まだまだ試行錯誤してばかりですがとりあえずどうぞ！

チームワーク

太陽が真上にあるころナルトサクラサスケの3人は丸太の前にいた

ぐぅ～

お腹のなる音が響いた

「お～君たち腹がなってるねぇ～♪」

カカシがからかうような口調で話す

「ナルトお前はアカデミーに戻る必要はない。合格だ。」

そしてカカシはサクラとサスケに目線を向ける

「お前たちもアカデミーに戻る必要はないな」

サクラは嬉しそうな顔をしサスケは

「ふんっ」

といって得意気な顔をしていた

「うん・・・・お前ら二人は忍をやめろ」

サクラとサスケは当然驚いた顔をしていた

「忍をやめろって確かに鈴は取れなかったけど何でそこまで言われなければいけないのよ！！！」

「お前たち二人は忍になる資格すらないガキだってことだよ・・・・」

その言葉に我慢出来なかったのかサスケが飛び出す

しかしアッサリカカシはサスケを押さえて顔を踏みつける

「だからガキだって言ってんだよ。」
カカシは何も期待してないみたいな目でサスケを見下ろしサクラの方を見る
しかしここでサクラが何も言わないことに今度はナルトが疑問をもった
（ここでサクラちゃんって何か言わなかったけ？）
【はぁ～】
あまりのナルトの鈍感さに九尾は思わずため息
カカシはやれやれと首をふる
「お前たち二人はまるでこの試験の答えを理解してない。ナルトはそれをわかってたから合格なんだ」
サクラはそこでナルトが言っていた事を思い出す
「ナルトは何かわかっていたの？」
ナルトは少し考えるようにして一言だけサクラの問いに答える
「チームワーク」
「その通りだ。三人でこればサクラもサスケも鈴を取れたかもな」
しかしここでサクラは何か思いついたように反論する
「チームワークって鈴は二つしかないじゃない！それじゃあチームワークどころか仲間割れよ！！！」
「これは仲間割れをさせるように仕組んだ試験だってばよ。鈴を二つにした理由は自分の利害とは関係なく動ける者を選抜するためってところか。たぶんカカシ先生が本気だったら俺も鈴を取れてなかっただろうし」
ナルトが答えた
「ナルトの言うとおりだ。それなのにお前ら二人ときたら！サクラ！お前はずっと考えこんでるだけ。ナルトが戦ってるのを見てたのにも関わらずだ！」
「ッ！！！」
サクラは何も言わない
「サスケ！お前は二人を足手まといと決めつけて個人プレイ！」

サスケはカカシの足元で苦いものを噛み潰したような顔になる
「任務は班で行う。確かに忍者にとって卓越した技能も必要だ。しかしそれ以上に重要なのはチームワークだ。これを乱すものは仲間を危機に陥れ殺すことになる。例えば」
カカシがサスケの首にクナイを突き付ける
「サクラ！ナルトを殺せ！じゃないとサスケが死ぬぞ！」
「え？！」
サクラはナルトとサスケを交互に見る
「とこうなる。人質を取られたうえ無理な2択を迫られ殺される。任務は命がけの仕事ばかりだ」
そこまで言うとカカシはサスケを解放する
「これを見ろ。この石碑に刻まれてる無数の名前を。これは全て里で英雄と呼ばれる者達だ」
カカシが石碑を見て言う
「任務中に殉職した人たちだよな」
ナルトがしばらく閉ざしていた口を開いた。サクラとサスケは驚いた顔をナルトに向ける
「その通りだナルト。これは慰霊碑だ。この中には俺の親友の名前も刻まれている。」ここでカカシが言葉をいったん切る。その表情からは何も読み取れない。しかしナルトは以前にカカシの話を聞いたことがあったので痛いほど気持ちがわかってしまった
（うちはオビトにリンだったか。いやそれだけじゃなくてカカシ先生は父ちゃんの弟子だった）
そう考えればカカシは大切な人達をことごとく亡くしている。ナルトはどれだけ自分が恵まれていたかを痛いほど感じていた
「お前たちにもう一度チャンスをやる。ただし昼からはもっと過酷な鈴取り合戦だ。ナルトは弁当食ったら帰っていいぞ。ただしサスケには弁当を食わすな。仲間を役立たずと見下したり上官に逆らった罰だ。サスケに弁当を食わしたやつはその時点失格にする！」
「テメッ！」「ここでは俺がルールだ。分かったな？」そお言うと

カカシは姿を消してしまった

ナルトは弁当の所に行き
「サクラちゃん弁当食おうってばよ」
「でも・・・・」
サクラはサスケの方を見る。そんなサクラを見てナルトは微笑む。
「大丈夫だってばよ。俺の弁当半分やるから」
サクラとサスケはビックリした表情になる
「何いってんのよ?!カカシ先生の言ったこと忘れたの!あんた失格になっちゃうわよ!!!」
「俺はいいからお前らで食え」
サクラそしてサスケも言う。自分のせいで失格になったら後味が悪いのだろう
「大丈夫だってばよ。カカシ先生の気配はないし。それに腹ペコじゃ力も出ないだろ?午後からは3人で鈴取りに行くんだからな」
「ちょっと待って!あんた鈴とったんだから午後からは鈴取り参加する必要ないでしょ?」
サクラは疑問をもつ
「俺はこの三人で合格したいってばよ。だから気にする必要はないってばよ。だからみんなで弁当食お?」
そしてサクラも言う
「私の弁当もサスケ君にわけてあげるわ」
そしてサスケは静かに笑みを浮かべ
「ありがとう」
と言ったそしてみんなで弁当を食べ始めた瞬間
「お前ら〜!!!」
ボンと煙を出してカカシが現れた
「きゃ〜!!!」

「くっ！！！」
サクラとサスケは慌てて身構える
ナルトは落ち着いてカカシを見ていた
「お前ら！ルールを破ったんだ。覚悟はいいな！」
カカシがそう言うと両手を合わせ手に雷を走らせる
「俺たちは仲間だ！サスケにだけ弁当を食わせねぇなんて俺には出来ねぇ！」
ナルトはそう強く言った。サクラとサスケは驚いた顔をしたが
「そうよ！私たちは三人で一つのチームなんだから！！！」
そうサクラも言い
「ふん」
サスケは一言そう言っただけだったが顔は笑みを浮かべていた
「三人で一つ？」
カカシは厳しい表情を変えずに問う
「そうだ！確かに忍は掟やルールを破るやつはクズ呼ばわりされるかもしれねぇ！でも仲間を大切にしないやつはそれ以上のクズだと俺は思うってば！同じクズなら俺は後者を選ぶ！！！」
ナルトはそう感情をさらけ出し言い切った。確かにこれはかつてカカシから教わったことではあるが現在のナルトの本心だからだ
カカシは一瞬だが驚愕の表情を浮かべる。過去に殉職した親友と同じ言葉をナルトが言ったからだ。その表情はすぐに笑顔に変わる
「ご～っかく♪」
カカシの言葉に
「へっ？」
サクラはトホけた声を出しサスケも何が？って表情をしていた
「お前らが初めてだ。」
サクラもサスケもまだ何が起こったか判らないと言う顔をしている
「今までの奴等は俺の言うことを聞いてばかりのボンクラばかりだった。確かに掟やルールを破ったやつはクズ呼ばわりされる。だが俺はナルトと考えが同じでな・・・・仲間を大切にしないやつはそ

れ以上のクズだ！！！」
サクラとサスケは笑顔になる
「っと言うわけで試験は終了！明日から任務だ！帰るぞ♪」

「じゃあカカシ先生サクラちゃんサスケバイバイだってばよ！」
ナルトは解散したあと走って帰っていった
ナルトの後ろ姿を見ながらそれぞれ三人は思っていた事があった
まずカカシは
（ナルトの言動や行動・・・・新米下忍どころかまるで幾つもの修羅場をくぐり抜けた忍みたいだ。いくらナルトが木の葉で嫌われているからと言ってそこまでの物とは到底思えない。一度火影様と話をしてみるか）
っと思っていた
一方サクラは
（もう自分の気持ちは誤魔化せないわね。私はナルトが好きなんだ。今まではサスケ君しか見えてなかった。だけどそれは憧れに近いものだったのかも知れない。ナルトと同じ班になれてよかった）
と思っていた
サスケは
（今日わかったことは俺の力は上忍には遠く及ばないと言うこと。そしてナルトのやつは俺より遥かに強いということだ。だが不思議とそれほど悪い気はしない。確かに悔しさはある。たがそれ以上にこの班にいれば何か得るような気がする）
うちは残虐事件から復讐のことしか頭になかったサスケ。しかしそれ以外の何か重要なことを感じているようだった

カカシの疑問（前書き）

凄く短いです

ではどうぞ

カカシの疑問

トントン
「誰じゃ？」
「カカシです。」
「うむ。入るがよい。」
「失礼します。」
サバイバル演習が終わった後カカシは三代目の元に訪れていた。
「どうしたのじゃ？」
「聞きたい事がありまして・・・・ナルトの事です。」
「・・・・水晶で演習の様子あとミズキを捕まえた時の様子などはわしも見ていた。」
三代目もミズキを捕まえた時から異常を感じナルトのことを見ていたのだ。

「はっきり言ってわしにもナルトの強さの秘密は分からん。何か隠しているのかもな。ただスパイではあるまい。ここ最近でもナルトには何回か会ってはおるが気配に変化はない。」
「そうですか・・・・」
カカシは三代目でも分からないのかと考える。

「しかし今日ナルトと手合わせしたお前ならナルトの実力は計れたじゃろう。わしも見ておったが少なくとも中忍相手に力量を隠すぐらいは出来そうじゃのう。」

「はっきり言ってナルトの実力は底が見えませんでした。おそらくまだ全力を出しきってはいないでしょう。」
ある程度の実力者なら少し手合わせしただけで相手の力量は計れるものだ。しかし上忍のしかも木の葉のエリート忍者であるカカシが

計れないと言うのだから相当なものと言うことになる。
「うむ。もしかしたらもう九尾の制御が出来るのかもしれん。それなら納得いく部分もある・・・・とりあえずカカシ、お主は今まで通りナルトそれとサスケのことも見ておれ」

「分かりました。」
カカシはそう言うと火影室を出て行った。二人に気づかれずこの会話を聞いていたものがいるとは知らずに・・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0207z/

過去へ

2011年12月24日10時51分発行